

永井先生への感謝

土 屋 孝 次

永井博史先生には、30年以上にわたり大変お世話になった。エピソードが多すぎてすべてを語ることはできないので、私の最初の論文と現段階での最新論文の二点について思い出を記し、個人として永井先生に感謝を示したい。

永井先生が近畿大学法学部に赴任された春、難解な民事訴訟法を担当する若手の先生が来られるとのことで、我々学生も大いに歓迎し、新しい風が吹くような気持になった。公法専攻であった私は主に同時期に赴任された西鳥羽和明先生の研究室に出入りしていたが、受講していないにもかかわらず永井先生の部屋へもよく伺い指導を受けたものだった。今から思うと厚かましい学生である。

数年後、オーバードクターになっていた私は、最初の論文の発表場所のことで永井先生の世話になることとなった。私の研究計画では、数本の論文を書き上げ、それをまとめて博士学位請求論文とする予定であった。当時の法学研究科において博士号を取得していたのは留学生のみであり、まずは研究業績数を増やすのが現実的であった。やっとのことで論文を書き上げたが、従来院生の発表場所として利用されていた『比較法・政治研究』が諸般の事情により休刊となっていた。そこで、指導教授である畑博行先生を通して法学部が持つ『近畿大學法學』へ投稿したいと希望したのであるが、院生論文の掲載は前例がないとのことで一年以上ペンディングとなってしまったのである。預けた論文を他に投稿し直すこともできず、次

の論文も脱稿してしまうという状況に、さすがに落ち込むこともあり、永井先生ら若手の先生方に慰めていただいたものである。その後、大学院法学研究科と法学部との協議が整い、学部の法政研究会での報告を条件として『近畿大學法學』への投稿を認められた。

いま手元に研究会世話人として法学研究科長の西原道雄先生とともに永井先生のお名前の載った案内文書がある。阪神淡路大震災から半年後の1995年6月19日、場所は18号館4階の旧法学部会議室だった。院生仲間の研究会ではなく、学部時代からお世話になった先生方の前での報告なので緊張したものだ。論文投稿についてご心配をかけた永井先生には当日も励ましていただき、報告後には特に理解が不十分であった訴訟物理論に関してアドバイスを受けることができた。私の拙い最初の論文はこうして無事に『近畿大學法學』に掲載されることになった。数年後、当該原稿に加筆修正を加えたものを第1章に位置付けた博士學位論文を大学院に提出し、學位も取得することができた。さらにその骨格部分は二十年後に拙著の一部となり、改めて世に送り出すことができた。怠惰な私が研究者への道を進むにあたり、永井先生の御尽力と励ましがあつたことを忘れてはいない。

2018年7月7日、雨の降る中、西宮市内の病院に永井先生の見舞いに伺った。病室で先生はニュース番組を観ておられた。前日は西日本各県に特別警報が発表され、近畿大学東大阪キャンパスも朝から休校となっていた。大規模な自然災害が映された画面を見つめながら、先生は「大変なことになったね」と言われた。直近に見舞った同僚からはご病状について厳しい話が伝えられていたが、先生は社会への関心を失ってはおられなかった。

私には自分の研究について、永井先生の教えを請いたい事項があつた。裁判官忌避制度を合衆国憲法修正14条のデュー・プロセス条項に根拠付け

たアメリカの最新判例を紹介するにあたり、我が国においても同様の議論が妥当するかどうかに関心を持っていた。永井先生が民事訴訟法上の裁判官忌避に関する研究業績をお持ちであることは知っていた。永井博史「裁判官忌避の制度瞥見—裁判官忌避の制度は飾り物か」近畿大學法學46巻1号（1998年）1頁以下、である。永井論文は、田中耕太郎最高裁長官が裁判官忌避制度を廃止すべきとした提案を批判的に検討し、民事訴訟実務における忌避制度の機能不全を疑問視していた。他方私は憲法学の立場から、裁判官忌避制度について、公正な裁判所による公平な裁判を受ける国民の権利の具体化として組み立て直し、国民の裁判所への信頼を確保するとの重要な意義を再確認すべきではないかと考えていた。制度意義に立ち返った永井論文は、私の研究にとって重要な示唆を含んでおり、この点に関して永井先生の現在の御意見を伺いたかったのである。

その日の永井先生は、お声こそ出しにくそうではあったが話題豊富であり、ご自身の容態の件や学部、大学院のあれこれについて多く語られ、見舞い時間があっという間に尽きようとしていた。結局、病室で私は研究に関する話を切り出すことができなかった。ただ、辞す前に現在執筆中の論文に永井先生の研究業績を参照しており、脚注に引用させていただいていることのみを伝えた。田中長官発言の現代的影響について、今後も勉強していきたいと言った。先生は、ただ、うなずいておられた。私の研究の件は次回の見舞いの際でも間に合うと考えていたのである。その二日後に先生は突然逝かれた。

私にとって永井先生は最初の論文から最新論文までお世話になった先生であった。学生時代から研究の機会を与えていただいた恩師であり、そして同僚となって以降は学部運営に関して多くのアドバイスをいただいた先達であった。心からの感謝の意を表したいと思う。